

浪川瑞希編

浪川瑞希編

一月二日(月)

「大変申し訳ないんですが、次の入荷がいつになるかは分からなくて」

何度目か分からない定型文を、一言一句間違えないように気をつけながら再生する。私に問い合わせてきたおじいさんは、向こうの方が申し訳なさそうな表情で「そうですか。ありがとう」と微笑みを返し、ペット雑誌の棚へ移って行った。

「札立ててわざわざ書いてんのにね」

店長は、すぐ後ろにある「攻略本、売り切れました」の立て看板を触りながら、黒縁メガネの向こうから、「困ったもんだ」とでも言いたげな眼を送ってくる。

「浪川さん、もう六時だし、上がって」

レジ上の時計を見やると、いつの間にか六時を少し過ぎていた。レジ前に列ができつつあるけど、「僕が行くから、貴女は帰れ」とアイコンタクトを残した店長が、小走りでそちらに向かった。

「お疲れ様です」と出来る限り愛想良く会釈をしながら、従業員用ドアを抜け、更衣室でエプロンを外す。事務所のロッカーにエプロンを押し込み、カバンを取り出してタイムカードを押す。従業員用の通路から出て、上着とマフラーを整えながら一般客に紛れ込む。首から下げっぱなしのセキュリティーカードはカバンの中、と。

人が多すぎるなんて滅多にないイオンも、今日は地元の人っぽい親子連れ、祖父母連れな人たちで賑やかだ。いつものようにスタバへ足が向かうけど、中で飲むのは無理かもしれない。

飲食店の前で並んでいる人たちを避け、のんびり広がって歩く親子連れ、向かいから歩いてくるカップルの間をぶつからないように抜ける。平日の夕方に比べれば短い列が見えてくるものの、お店の中は会話が盛り上がっている団体さんでいっぱいらしい。年始の限定フラペチーノも気になるけど、今日はまっすぐ帰ろうかな。

スタバに背を向けてポケットのスマホを取り出す瞬間、明らかに周りから浮いてる二人が視界に入った。向こうも何となく察したようで、視界の端でこちらに手を振ってくる。

——瑞希、なに飲む？

——抹茶のフラペチーノ。大きいやつ。

すぐに既読がついて、どこで買ったかよく分からないスタンプが返ってきた。レンズの大きいサングラスでキメた女の人を置いて、財布を握った一兄が列の最後尾に並んでくれた。「お前は座ってる」のジェスチャーがめっちゃくちやウザい。正直、気乗りしないというか、易々と隣に座れない空気を乗り越えて、女の人の向かいに座る。カバンを膝の上に乗せる間もズーッと視線が追いかけてくるう。

「アレ、さつきも居ませんでした？」

「うん。抜き打ちの素行調査。査察？」

茨木の、それも太田のイオンには全く溶け込まない覆面調査官、十分ぐらい観察されて、ファッション誌と地元特集のムック本を立ち読みされたっけ。

「一兄は」

「一人でブラブラしてた」と、私のオーダーを連れてきた。すっかり小洒落て都会の男になつたらしい長兄と、モデルのようなこの人と。実はお似合いなのかも。

「ついでにアレも」

「アレね」

女の人は、コビトカバのストラップをつけたカバンの中から、ニフレルのロゴがついた紙袋を取り出した。一兄に促されるまま受け取り、後ろのシールを外すと中から出てきたのは、リアルなカバの口元がプリントされた布マスク。

「ワゴンで投げ売りされてたし、お土産」

これは流石にリアルすぎて、つけるにつけない。

「私とお揃い」

目の前のお姉さんは、シュツとした手付きで、カバンから取り出した開封済みのカバマスクをつけて見せた。自信に満ちたキメ顔と整った顔立ちとカバの口元のミスマッチがヤバイのに、全く動じない。

隣の一兄はニヤニヤしながら視線を送ってくる。二人分の圧に負け、封を開けずにマスクを口元にかざしてみた。一兄は声を抑えながら盛大に笑い、カバマスクのお姉さんは嬉しそうに眼を細めてマスクを外した。

「私たち、仲良くなれそうね」

「え、ああ、そうですね」

お姉さんは和かにコーヒーカップを口元に運んだ。私は私で、氷が少し溶けたフラペチーノを吸う。今更だけど、大きいのを頼まなきゃ良かった。正月二日目の晩酌が始まった画像が届いて、何時に帰れそうか想像を巡らせた。

初出 令和三年二月一二日 noteにて公開

二月九日（木）

一足先に実店舗での撮影を終え、貸衣装から着替えて沙綾さんの撮影を見守る。背が高くて日本人離れたスタイルとクッキリした目鼻立ちは、すごくいい写真が撮れそうだ。どちらかと言うとのつぺりとした奥二重の私は、チンチクリンの身体が生かせる程度に裏方をやる方が良い。

プロの仕事の邪魔にならないよう気を付けながら、カメラマンの撮影方法をじっくり観察する。構図の決め方から照明器具の置き方、学校では触らせてもらえていない機材まで、この機会に隅々まで観察させてもらおう。

「写真撮影も、気になるんだ」

今日は記録係として現場に来ている哲朗さんが後ろから声をかけて来た。

「スチールの勉強も、動画に活かせるから」

哲朗さんを見て答えたのに、彼は少し視線を逸らした。ガラスに反射する自分の顔を見ると、ヘアメイクは撮影時のままだった。何気なく哲朗さんの方へ一歩近づくと、彼は一定の距離を保って横に動く。

哲朗さんと戯れていると、沙綾さんの撮影に一区切りがつく。カメラマンと武藤さん、沙綾さんは今まで撮影した画像を確認していく。哲朗さんも背後からそれを覗き込み、ザツと一通り見終えた沙綾さんは、メイクさんのところでチェックを受けている。私はさつきまで彼女が飲んでいた水を持って、沙綾さんに差し出した。

「ありがとう」

彼女はスツと受け取り、ストローをくわえた。沙綾さんが水を飲む間も、私は撮影機材が気になって、あちこちに視線を向けてしまう。

「瑞希ちゃん、撮る側に興味があったのね」

「撮る側っていうか、裏方全般に」

「出る方やれば良いのに。もったいない」

沙綾さんはボトルを私に返した。彼女は衣装を崩さないように立って、モニターに集まっているスタッフの方を見る。どうやら〇〇が出たらしく、武藤さんとカメラマンさん、このオーナーさんが笑顔を見せ合っている。手持ちのライト

を持ってカメラマンさんをお手伝いしていた照明さんが、私の方にやって来た。

「成人式の前撮りをする時は、ぜひ使ってください」

レンタル衣装と撮影スタジオの無料引換券を差し出した。私がそれを受け取っている、隣で装飾品を外されていた沙綾さんが照明さんに声をかけた。

「この娘、バイトにしない？」

「今、バイトは募集してなくて……」

沙綾さんの押しに、照明さんは「バイト代は出るか分からないけど、勉強しないなら、連絡してください」と自分の名刺も差し出してくれた。彼は軽く頭を下げて、武藤さん達の方へ戻っていった。

沙綾さんを見ると、自信満々な表情で私にウィンクした。彼女は「良かったね」と言い残して、更衣室へ入っていった。

「凄いパワーだね」

自分の荷物をカバンに詰め、哲朗さんが隣に立った。

なんとなくて自宅から通えるアルバイトを選んだけど、やりたいことがあるならガツガツ行かなきゃいけない。

「動画でやれることって、何かない？」

哲朗さんに、少々強めに投げかける。彼はちょっと考えて「Youtube」とか？」と言った。

「手垢がつききつて、今からYouTuber目指したってキツいだろうけど」

彼の言うことはもつともだ。もつと作家性を発揮できそうな動画共有サイトもあるにはある。機材やネタ、資金を理由に「作らない」をやるよりは、自分のやりたいことと目の前にあることを考えて、どうやるかを考えないと。

「これからどうすれば良いか、一緒に考えてもらっても良い？」

哲朗さんは一瞬息を飲み、すぐに力強い目で「もちろん」と言ってくれた。やっぱり、イイ人だ。

二月二十四日（金）

哲朗さんの妹、美桜さんは改札を通り、左手奥のエスカレーターを降りて行った。少々小柄ながら力に満ち満ちた女子高生は、連日の往復を一切苦とも思わず、平然と習い事にでも通うかのような足取りで今日も西宮へ帰っていく。

隣で一緒に見送っていた哲朗さんは、美桜さんがまだ見えている間に視線を逸らし、左へ身体を向けながら、全身で伸びをする。

「あくあ。やつと、帰った」

全身から力を抜き、大きな欠伸をして歩き出す。

「え、まだ」

「アイツのことは、適当でいいよ」

頭の天辺がまだ少し見えた気もするが、哲朗さんが駅を出てしまう。「ごめんなさい」と心の中で呟いて、哲朗さんの後を追いかけた。

「みいちゃんは、この後どうする？」

真っ直ぐ帰るなら、美桜さんと反対方向に一駅乗ってしまう方が早い。でも、今日は武藤さんのところに一兄が挨拶に来ている。演者さんたちと打ち上げにいった沙綾さんは、その後どうだったのかな？

なんとなく、哲朗さんの歩くままに合わせて隣を歩く。彼は三ツ茨木駅を出て、駅前商店街を右に曲がる。そのまま、市役所の方へ道なりに進むと株式会社ミサイズの入ったビルに辿り着く。

「哲朗くん、おかえり」

彼は応接スペースで打ち合わせをしていた武藤さん、一兄に挨拶を返し、自分の席に戻る。私は置きっぱなしにしていた自分の荷物を彼のデスクから拾い上げた。武藤さんは一兄との話を切り上げ、哲朗さんに声をかけに行った。

手持ち無沙汰になったらしい一兄が、私を応接スペースに座らせる。

「で、その後どう？」

カバンからMacを取り出し、画面を開いてYoutubeの管理画面とGoogleアナリティクスの画面を出して、一兄の方へ画面を向けた。彼は「へー。結構伸びてるじゃん」と画面のあっちこつちを見ながら言った。

「コビトカバのロゴも可愛いつて、**ニ**の間で人気らしいよ」

「マジ？」

「マジ、マジ」

「ロゴ、ありがとう」と言うと、「可愛い妹のためだから、気にするな」と答えて、今日の昼に上げたばかりの動画を再生した。

「へー。よくできてる」

「上手く行つてたらいんだけどね」

スマホをチラリと見るが、特にメッセージは来ていない。動画もまだ限定公開で、そんなに再生数は伸びていない。コメントも評価も、まだついていない。

一兄は自分のスマホを見て、すぐに何か返事を返した。

「じゃあ、帰ろうか」

「え？」

「向こうはまだ、遅くなるって」

一兄は椅子から腰を上げ、武藤さんに帰ることを伝えに行つた。武藤さんは飲みに行きたかつたようだけど、一兄は丁寧に辞退して私に「帰ろう」と促した。

「じゃあ、失礼します。哲朗くんも、またな」

一兄は私の背中を押して、先にオフィスから押し出そうとする。出しっぱなしのMacをカバンに仕舞い、促されまま株式会社**ニ**サイズを後にした。扉が閉まる瞬間、哲朗さんと目があつた、ような気がした。

「さ、行くか」

一兄は川端通りへ向けて歩を進めるけど、私は市役所近くの駐輪場へスクーターを止めてある。一兄に「こっち」と道を指し、駐輪場に向かって歩き始めた。

初出 令和三年二月二八日 noteにて公開

三月一四日(火)

色鮮やかなメニューを一ページずつめくり、最後のドルチェ、デザートまでしっかりと目視してクルツとひっくり返す。振り出しに戻って最初から眺めるものの、何を頼めばいいのかよく分からない。

向かいの席に座るルミさんがメニューから視線を上げ、「どう、決まった？」

と訊いてくる。私は曖昧に微笑んで、「すみません。まだ、迷ってて」と答えた。

「じゃあ、適当に頼んでもいい？」

私が頷くと、彼女は呼び出しボタンを押した。

「何か一品、どうしてもコレだけはつてのを選んでおいて」

メニューをじっくり見て選ぶ間もなく、ルミさんが読んだウエイトレスがやってくる。ルミさんはメニューを指差しながら、サラダやらチーズやらを頼んでいく。「それと、」と私の方を見た。

「ああ、じゃあ、コレを」

メニューを広げ、品物を指し示す。

「あと、ドリンクはフルーツワインのラ・フランスで。瑞希さんは？」

「お酒はアレなんですけど、オールフリーを」

ウエイトレスは注文を繰り返し、メニューを抱えて厨房へ歩いて行った。

「ピザ好きなんだ。意外」

「そうですか？」

「勝手に、和食とか魚好きだと思ってました」

ウエイトレスが先にドリンクを運んでくる。ルミさんと乾杯すると、彼女はグイッとワインを飲んだ。私はビール風飲料で喉を潤す。

「ルミさんはワインがお好きなんですか？」

「うん、嫌いじゃないけど、好きってほどでもないかな。コレは物珍しかったから、つつい。瑞希さんはそれで良かったの？」

ルミさんはウエイトレスが運んできた葉野菜たっぷりのサラダを、手際よく取り皿に分けてくれる。彼女に手振りで「食べて」と促され、「いただきます」と手を合わせてお箸を手を取った。一口頬張ると、食べ慣れない味が口中に拡がっ

ていく。

「一応、未成年なんで」

「えっ、ウソ。気を遣わせてゴメンねえ」

「いいいえ。ビールっぽい味は好きなんで」

ノンアルコールビールは家でも散々、晃兄に飲まされている。誕生日を過ぎたら、哲朗さんや一兄にも色々連れ回されるんだろう。

「いくつだっけ？」

「一九です」

「一九？ セコ下……。セコ下、か」

ルミさんは次々に運ばれてくる料理に目もくれず、茫然と何も無いところを見つめている。私はチーズやらソーセージの盛り合わせやらを適当に取り分け、自分の分を端っこから摘んでみる。

「仕事もできて、モデルもやれて、彼氏もいて。羨ましいなあ」

「か、彼氏なんていませんよ」

「本当に？ この間のおめかしは、誰がどう見てもデートでしょ」

ルミさんは底意地の悪そうな目つきでじつとり見つめてくる。通りがかつたウェイトレスを呼び止め、二杯目のフルーツワインを注文した。空きのグラスをそのままウェイトレスに手渡し、自分の目の前にある取り皿にフォークを突き立てる。サラダを口に運んで、ヤギみたいに口を動かして草を咀嚼した。

「アレは、ただのお出かけです」

「二人つきりでお出かけしたら、十分デートでしょうよ」

程よくアルコールが入ったルミさんは、新しく届いたワインをまたまたグイッと飲んだ。徐々にエンジンがかかり始めているこの人相手に、デートかどうか論争を持ちかけても勝ち目はなさそうだ。

哲朗さんとは彼氏彼女の関係かどうかの話に切り替えよう。それで納得してもらえるかは分からないけど、酔っ払いをなだめる、あしらうことを最優先に考えよう。上手くいくかは神のみぞ知る――。

四月二日（日）

哲朗さんの横に並んで、彼の妹を見送ったのはいつだったつけとどうでもいいことに思いを馳せつつ、先月の末だったつけとか、もう四月だから先々月になるのか、とか――。無理に思い出さなくてもいいことを必死に記憶から引つ張り出したり、カレンダーを頭に思い描いたり、さっきまでの高負荷を少しでも和らげようとしているのか、まだ終わっていない目の前の出来事にも、いまひとつ集中できていない。

遠ざかっていく人影をぼんやりと眺めながら、向こうがこちらを振り返ったから、半ば反射的に手を振り、軽く頭を下げた。ゆっくり視線をあげると、相手はもう見えなくなっていた。

「みいちゃん、みいちゃん？」

不意に呼びかけられた方へ顔を向けると、哲朗さんがエスカレーターを指していた。少し先にいた彼の背中を追いかけて、後ろのステップに乗る。一定の速度で地上階へ降りていく。

エスカレーターを降りて左手に少し進んだところで、急に足が止まってしまった。エスカレーターに乗っている時から哲朗さんが何か話しかけてくれているのは聞こえているけど、中身はいまひとつ頭に入ってこない。

哲朗さんは二、三步進んだところで私が立ち止まったことに気がついたようで、その場で足を止めて振り返り、「大丈夫？」と気遣ってくれた。今はその頼もしさが嬉しくもあり、恥ずかしくもある。できるだけ顔を直視しないよう、視線を微妙に逸らしながら、「ちよつと、気疲れしちゃった」と答えた。

一人もぞもぞしている間に、彼はこちらに近付いてくる。その近さにゾクゾクしてしまい、半歩だけ後ずさってしまった。今まで何ともなかったのに……。

「とりあえず、ちよつとそこで座ろう」

彼はバス乗り場横のベンチを指した。先導だけしてもらって、自力でそこまで歩いていく。私が無事にそこまで行くと、彼は駅のコンビニへ走って行き、常温の水を買って戻ってきた。隣に座って、ペットボトルを差し出した。

「あつたかいお茶の方がよかった？」

彼の顔は見ないで首を振る。ペットボトルを受け取って、一口飲んだ。少し気持ちが落ち着いたところで、ゆるゆると長く息を吐いた。ゆっくり呼吸と共に気持ちを整える。

「急にゴメンね。余計な負担かけちゃって」

哲朗さんは私の返事を待たず、一人で話を続けてくれる。音として認識はできても、やっぱり話の中身が頭に入っていない。

「この後、どうしようか？」

ぼんやりと顔を眺めていたのに、急に焦点が合ってしまった。一瞬の驚きが、だんだん別のドキドキに変わっていく。少しでも鼓動が治るように胸元を抑え、俯いて、なるべくいつも通りの声が出る、と必死に念じて口を開いた。

「あ、明日も早いから、今日はもう帰ろうかなって」

普段より少し大きめに、上擦った調子で言ったのに、彼は普段通りのトーンで「まだ夕方だけ」と返してきた。顔を見上げられないまましていると、いつもよりちょっとゆっくりな口調で「分かったよ。了解」と、彼は言った。

「僕も明日に備えて、今日は帰るよ」

彼は「一人で帰れる？大丈夫？」と付け加えてくれた。それに頷くと、彼は「じゃあ、またLINEするね」と言葉を残すと、私の隣から温もりと共に去って行った。

初出 令和三年四月三〇日 noteにて公開

四月二十四日(月)

「なあくんか最近、可愛くないね」

四人掛けの席で目の前に座った沙綾さんは、赤のハウスワインが届くなり早速喉を湿らせて私に言った。あまりに唐突な言い方に、水を入れてきたグラスを落としそうになる。

「そうですか？」

彼女は頷いた。

「前は違う意味で可愛くなかったけど、それが無くなったかな……」

沙綾さんの言いたいことがイマイチ飲み込めず、一人でジッと考え込んでいると、彼女は運ばれてきた辛味チキンをパパッと二つ食べてしまった。「嗚呼っ」

と思っている間に、例の魔法の粉をササッと塗ってしまう。

相当残念そうな表情でじつと見つめていたらしく、沙綾さんには珍しく「あら、ごめんなさい」と頭を下げた。彼女は呼び出しボタンに手をかけながら、「もう一つ頼む？」と訊いてくれた。それに首を横に振って応えたのに、彼女はボタンを押した。呼び出された店員さんに白のグラスワインを頼み、空きのグラスをついでに下げてもらおう。

店員さんがテーブルを離れるのを見守ってから、沙綾さんは私の目をジッと見る。

「で、哲朗がどうしたって？」

彼女は頬杖をついて、つまらなさそうに言う。取り繕った返事をして、彼女は「そういうの、いいから」と取りつく島もない。「欠席裁判が嫌なら、本人呼んじやう？ もう、仕事も終わってるんでしょ？」

容赦ない詰めっぶりに、自然とあうあうしてしまふ。いつもながら、この人強い。一兄、こんな人と同棲してるなんて、凄すぎ。などと、この場にはいない人のことを褒め称えている暇なんてない。

さっき二人でZサイズの事務所を出る時にはいなかったから、哲朗さんは今頃、駅の向こうの学生マンションに帰っているはず。呼び出したってすぐに来れる距離だけど、なんとなくメッセージは送りたくない。

「呼べない理由が何かあるのか。なるほど……」

スマホをチラッと見たのがバレたらしい。沙綾さんは新しくテーブルに届いた白ワインをゆつくり味わっている。しつかり口の中で転がしてから、飲み込んだ。テーブルには、マルゲリータやらパスタやら運ばれてくる。彼女は店員さんに愛想良く「ありがとう」と言うと、早速パスタをフォークで巻き上げた。私はピザカッターを握って、歪な円形に下手くそな切れ込みを入れていく。沙綾さんはパスタを一口食べ、ワインを飲んだ。彼女はフォークを持ったまま、私の方を見る。

「コレ食べたら、私、帰っちゃうけど」

「えっ、あ……」

彼女の宣言に不意を突かれ、言葉が出てこない。相談したいことも色々あったのに、考えがまとまらない。

「帰る前に、突撃しちゃう？」

彼女は悪い笑みを浮かべながら、ワインを飲む。

思い切って突撃？ それも悪くないような。少なくとも、夕方に見た光景は拭えそうな気がする。私は不器用に切り分けられたピザを口に運んだ。

「私も一口、もらっていい？」

沙綾さんは、私が「どうぞ」という前に、スッと小さめの一切れを持って行った。彼女はニヤニヤしながら、ピザとワインのマリアージュを楽しんでいた。

初出 令和三年五月八日 noteにて公開

五月一〇日(水)

「瑞希さんの気持ちは分かるけど、面白いのを書くんだよ」

森田さんは、印刷して肩をダブルクリップで止めたコピー用紙の束を差し出した。それ、結局分かってないんじゃないかなと思いつつながら、渋々受け取って流し読みする。確かに引き込まれる文章な気はする。あの人の顔が過ぎつても、読み物として嫌いになり切れない。

「取り巻きっぽい二人も中々興味深いんだよなあ。特に、あの青柳さんて子？心理学部に来る京都人っぽさが、いい味になってる」

森田さんの横から、武藤さんが山積みになっている束から、青柳さん、鈴木さんの文章を引っ張ってくる。青柳さんのエッセイが効いているエッセイは、文章こそ練り上げ切っていない印象があるものの、朋子さんのエッセイと比べても、引けを取るものには思えない。

「瑞希さんは、そういう話をしてるんじゃないと思うんだけど」

後ろから、香織さんが声をかけてくれる。男どもは分かかっていないと言わんばかりの表情で、私に笑いかけてくれる。

「兄貴も康徳さんも、娘いるんでしょ？ 父親としてはどうなのよ」

香織さんの問いかけに、武藤さん、森田さんは腕を組み、難しそうな表情で上の方を見る。武藤さんの方が先に口を開いて、「うくん、人生経験と思えば、そういう困難があつてもいいかなあ、と」と答えた。それを聞いていたらしい森田さんは、「そういう見方もありますね」と同調しながらも、「僕は、瑞希さんみたいな娘に育つて欲しいなと思いますよ」と言った。

「作家の子、クリエイターになりたい子が真つ直ぐすぎるのも変な気はしますけど」

「陽菜がそういうテクニク、駆け引きに走る娘にはなつて欲しくはないなあ」

武藤さん、森田さんはお互いの顔を見合わせ、同時にゆっくり大きく頷いた。

「でも、明子さんとは会ってるんだろ？」

武藤さんは自分のスマホを持ち出しながら言う。

「瑞希さんはいい娘だったって、俺も聞いてるし」

彼はメッセンジャーを開いて、明子さん、哲朗くんのお母さんとのやりとりをグツと突き出してくれた。武藤さんはスマホを机の上に戻しながら言う。

「他の娘より、一步も二歩も先んじてるんじゃない？」

「哲朗くんなら、身持ちも堅そうだし」

何かの弾みで間違いを犯す人なら、私も苦勞はしない。香織さんは「でも、アレぐらいの男の子なら、その時はその時よね？」と横槍を入れる。

「聖人君主でもないんだし、据え膳食わぬも、私は嫌かなあ」

何をやっても暖簾に腕押し、靡くことのない安全物件というのも、面白みに欠ける。駆け引きの面白さ、揺さぶる楽しさぐらいは確かに欲しい。それも分かる分かるけど、と香織さんに視線を送る。彼女と視線が落ち合うと、「あ、ごめんなさい」と舌を出して謝った。

「いやあ、青春だなあ」

森田さんは腕を組んで、しみじみと呟いた。そんな森田さんに、隣にいた武藤さんが「森田さんはまだ、羨ましいって歳じゃないでしょ」と突っ込んだ。それを見ていた香織さんまで、楽しそうに笑っている。

大人たちは他人事だと思つて、やいのやいのと談笑している。こっちは本気で相談するのに、なんだかなあ……。自分で答えを出さなきゃダメなのは分かっているけど、どうしたものか。悩みは晴れないまま、刻一刻と時計の針は進んでいく。

初出 令和三年五月一四日 noteにて公開

五月一九日（金）

久々に、哲朗さんの部屋に二人で向き合っている。碧さんと彼の扇情的な絡みを垣間見て以来の空間は、何となく緊張感が漂っている。ちよっぴり俯き加減で目を合わそうとしない哲朗さんも、どうやら少しは気まずいらしい。

何でもなかった時は普通に遊びに来て、いたずら心から押し掛け女房的な料理をしたこともあったけど、今はそういうおふざけも気軽にしにくい。何をどう間違ったか、これからどうしたいかもちゃんと考えないといけないけど、眼前に迫るもう一つの問題を解決しないと、腰を据えた話なんてできそうにない。

私の説明を聞いた哲朗さんは一呼吸置いて、「つまり、明日浪川家に遊びに来い、ってことでいいのかな？」と、内容をかいつまんで質問してくれた。私は縦に首を振った。

「できれば、一輝さんが来る前から家にいて、お邪魔してますって雰囲気は僕に醸せ、と？」

「事前に何も聞いてなくて、たまたま居合わせました、って感じに演技してもらえれば、最高なんだけど」

「いやいや、今聞いちゃったから、流石に顔に出るって。沙綾さんじゃないだから、演技なんてできないよ」

彼はそこそこ取り乱して、私のプランを否定する。こうなるなら、明日適当にメッセージを送って、サプライズで急遽呼び出した方が良かったかもしれない。

でも、私も沙綾さんから指示を受けて事前に擦り合わせを行っているのだから、もう少しこちらの意向を汲んでくれてもいいんじゃない？ それに、私だって――

「私だって、急にお母さんに引き合わされて大変だったのに、ちよつとぐらい協力してくれてもいいじゃない」

哲朗さんは私の声に驚いて、目を丸くしてこちらをジッと見ている。

「沙綾さんもフォローするって言ってくれてるんだから、乗っかってよ」

「そ、そっか、そっか……。そうだよね、ごめん」

哲朗さんは最後にもう一度小さな声で、「ごめん」と呟いた。しゅんとした表情で今度は下を向く。ジッと俯いたまま、両手を閉じたり開いたりを繰り返して

いる。やつぱり小さな声で、「よし、分かった」と言つて顔を上げた。

「協力するよ。その代わり、居合わせるだけだから。演技が下手でも笑わないでくれよ」

鼻息荒く言い切ると、最後の「笑わないでくれよ」が妙におかしく、私は小さく吹き出してしまった。真剣な顔と口調のミスマッチがまた、ツボに入つて笑いが止まらない。

「ちよつ、みいちゃん」

「ご、ごめんさい」

私は呼吸を整えながら、目元に涙を拭つた。心配そうな表情をベースに、色々な感情が入り混じつた顔は、まだ笑いのツボを刺激してくる。笑つてはいけなと思えば思うほど笑いがこみ上げてくる。グツと拳を握り、口からフーツと長い息を吐いて諸々整え直す。

顔を上げ、視界に入る不満げな顔もやつぱり可愛いな。一応向こうのほうが年上だけど、どんどんいじつてオモチャにしたくなる。そんなどうでもいい思いも頭から叩き出し、真剣な話を仕切り直さねば。

「沙綾さんの予定によれば……」

明日の予定、段取りを確認していく。幸い、授業は何とかなるのありがたい。今回ばかりは、碧さんにも感謝しなくては。先日のシーンをちよつと思ひ返したら、自然と胸が昂まつていく。悶々としているのを悟られないように、平静を装わねば。今はとにかく、真面目な話、真面目な話……。

初出 令和三年五月一八日 noteにて公開

六月一日(日)

「茨木の川が、そんなに魅力的か？ どこにでもある風景だと思うけどなあ」

一兄は隣で運転しながら、心底面倒臭そうに言う。

「どこにでもありそうだけど、そこにしかないから良いんじゃない」

「いやいや、安威川も茨木川も大したことないって。有名な橋も別にかかってないし」

「橋がどうかじゃなくって、そういう自然を含めたシーンを良い感じに撮りたいんじゃない」

私がどれだけ力説しても、一兄にはピンと来ないらしい。彼は延々とブツクサ言いながら、ハンドルを握っている。ただ、せつかくの日曜日に、サンデードライブばかりで中々動かない一七一号線を箕面方面目指して走らされているのは、お願いした私もちょっとだけ後ろめたい。

「ローソンの先で、一七一行かずにこつちに曲がる、と」

下井のバス停を過ぎた辺りで、左手の細い道に入ってもらおう。細いとはいえ、バスが通れるだけの幅は十分にある。この先に、郡山宿本陣があるらしいけど、そのまま道なりに真っ直ぐ行ってもらおう。

「このまま勝尾寺川渡ると、車止めるところないぞ」

「良いから、このまま行つて。橋を渡つたところの、川沿いの細道が最高だから」
バスで箕面方面、豊川駅の方を目指すとここでグツと曲がって、一七一号線に再合流する。バスに乗つてると一瞬しか見えないこの画角を抑えておきたい。

「道幅も狭いし、そんなに停めてられないって」

「じゃあ、私たちだけ降りよう。イイ？」

一兄の回答を待たずに、ルームミラーで後部座席の哲朗さんに視線を送る。彼はちよつと疲れた目で頷いた。私は早速ドアに手をかける。「分かったから、ちよつと待て。一瞬停めるから」

一兄は車を少し歩道に寄せて、車を止める。私たちが降りるのを待ち、後ろから来る車に気をつけながら、再び車を走らせた。奥の信号まで行つて、右折をすすらしい。私は早々に視線を切り、右手に見える製紙工場、その奥に見える巨大

な倉庫を視界に入れながら、左手の勝尾寺川、眼前の広大な空を画角に収め、何枚か写真を撮る。

哲朗さんにもフレームに入ってもらい、再度映り方を確認する。フレームの中で背中を向ける彼は、撮影ボタンを押すごとに微妙に動いて、スマホを取り出した。彼は両手を口に添え、拡声器を作る。

「バス停前のセブンイレブンにいるって」

一七一号線を茨木方面に戻ったところのセブンイレブンか。徒歩だとちよつと遠いじゃない。とはいえ、戻ってきてもらってピックアップするのも難しいと言うか、申し訳ない。哲朗さんがこちらに戻ってくる。一兄の車が辿ったであろう軌跡を、自分の足で追いかける。一兄はいつの間にか車を降り、コンビニでアイスを買ってお店を出てきた。

「え、自分の分だけ？」

私が呟くと、彼は手元の袋をガサガサさせて、哲朗さんにアイス差し出した。自分のアイスを啜えながら、私を見やる。

「お前の分はない」

一兄は、自分のアイスを私に渡そうとする哲朗さんを制し、「それは君の分」と付け加えた。

「お前は自分で買ってこい。隣のマックにシェイクもあるぞ」

一兄は、顎でマクドナルドの看板を指した。

シェイクも魅力的だけど、向こうまで歩くのもちよつと辛い。哲朗さんに視線を送ると、彼は微妙に目を逸らし、買い与えられたアイスにかじりついた。

初出 令和三年五月二一日 noteにて公開

六月二七日(火)

学祭のミスコンに出たら、スツと上位に入賞して卒業後はどこかのアナウンサーでもやっていそうな、「ザ・女子大生」が目の前席でアイスコーヒーを飲んでる。私も同じ大学に通う女子大生には違いないのだけれども、キャンパスの違いか、学部の違いか、あるいはそもそもその育ちや遺伝子が違うのか、同じカテゴリーに属しているとは思えない。

隣でホッチキス留めたA4用紙をペラペラめくっている沙綾さんに目を向ける。哲朗さんも一兄同様、ボリューミーで可愛い人が良いんだろうか。身体の凹凸まで控えめにならなくても良いのにと、自分の胸元に手を当てる。一瞬チラッと見た私の視線に気がついたらしく、上坂さんと目があつた。彼女の微笑みに弾かれるように、視線をそらした。

沙綾さんは資料を何度か繰り返し見て、「なるほどねえ」と何度か頷いた。彼女は上坂さんの顔を見ながら、手元の資料を上坂さんに差し出した。

「あなたみたいなのが、こんな企画を持ってくるなんて意外だわ」

上坂さんは、「そうですか?」と言いながら、資料を持ち帰るように手で示した。沙綾さんはそれを拒んで、さらに資料を突き出した。

「PDFでもらうわ。森田さんも持つてるんでしょ?」

上坂さんは「ええ、まあ」と言いながら、沙綾さんが突き返した資料を鞆に仕舞う。彼女が突っぱねたことと、上坂さんが資料を片付ける様に笑う要素は微塵もなかったけど、つい口元が緩んでしまう。

沙綾さんは私の顔を見て、一瞬ニヤリと笑うも、すぐに口元を指して表情を戻せと促してくれた。

「でもさ、森田さんも性格悪いよねえ。とんでもない企画じゃない?」

沙綾さんはボソツと呟いて、アイステイラーに口をつけた。資料を仕舞い終えた上坂さんは顔を上げながら、「そうですか?」と言った。

「私は、映像学部の胸を借りる良い機会だと思えますけど」

彼女の冷静な視線が、私の胸元に突き刺さる。

「それにしたってねえ?」

沙綾さんが私に代わって返してくれた。

「私ごときでは相手にならない、と？」

「いえいえ、そんな。才能豊かな先輩と競えて大変光栄です」

「良いねえ。やる気満々じゃん」

やると決まったからには、負けられない。森田さんのお膳立てにそのまま乗っかるのは面白くないけど、その思惑すら飲み込んでやろうじゃない。

隣の沙綾さんも両方の企画に関わる当事者、両作に出演するキャストという最も大変な役回りだろうに、随分楽しそうに笑っている。私と上坂さんの間に漂う緊張感も、彼女には日々を楽しくするスパイスに過ぎないらしい。

「まあ、明確な勝ち負けなんてないんだし、お手柔らかに」

自信に満ちた笑顔で、右手がスツと差し出される。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

私はその手を、グツと力一杯握り締めた。上坂さんは表情一つ変えることなく、グツと握り返してきた。企画の意外性に通じるような、見た目に反する力強さだった。

彼女はスツと握手を解くと、腕時計に目をやった。

「そろそろ帰らないと」

彼女は鞆を肩にかけた。私たちも荷物を持って、腰を上げる。伝票は沙綾さんが摘み上げた。ほぼ手ぶらの彼女が先に行き、私たちはその後をついてレジに向かった。

初出 令和三年六月一五日 noteにて公開

七月二〇日（木）

最初は遠慮がちに手を伸ばしていたお菓子も、三つ目ともなると封を開けるところから口に入れるところまで、微塵も滞らない。「残しておいても一輝が食べるだけだから」と最初に言われたのに、哲朗さんは手元に置かれたものにも、まだ手をつけていない。

沙綾さんは、哲朗さんのカップに紅茶のおかわりを注ぐ。哲朗さんはまだ緊張が残っているようで、ちよつぴり硬い動きで「どうも」と軽く頭を下げた。

邪魔にならないところへポットを置いた沙綾さんは、自分の席に腰を下ろしながらお菓子を摘み、一口かじった。パリッと仕上げられたラスクの咀嚼音が微かに聞こえてくる。

「どう？ 何か、思いつきそう？」

沙綾さんの問いかけに、返す言葉がパツと出てこない。昨日今日の問題じゃなく、一週間近く考えてきた宿題にも関わらず、私も隣の彼も、スツと回答が出てこない。

「サポートの哲朗くんは仕方ないとして、言い出しつぺのまいちゃんが何にも持つてこれないのはダメなんじゃない？」

沙綾さんは、厳しい目つきと険のある声を私に投げかけた。哲朗さんが隣で身を乗り出して何か言いかける前に、彼女はすぐに表情を和らげて「ま、難しいんだけどね」と優しく言った。

「途中まで検討した捨て案はあるんでしょ？」

沙綾さんの言葉に、哲朗さんが「これです」と印刷した企画書を数点、鞆の中から取り出した。沙綾さんは更に「ボツ案もあるならデータをもらつて良い？」と言った。

「じゃあ、リンクを送ります」

「サンキュー。コレね」

沙綾さんは手元にあるタブレットを見て、ボツ案も含めたデータを眺めてくれている。哲朗さんから受け取った書類も確かめながら、「なるほどねえ。確かにコレだとパンチが弱いかね」と呟いた。沙綾さんは書類を脇に置き、タブレット

トから顔を上げた。

「王道のエンタメに、こだわりのビジュアル重視は良いと思うんだけど」

「映画として最後まで見てもらう面白さというか、ご褒美が足りない？」

哲朗さんの呟きに、沙綾さんは渋い顔で「うん」と小さく唸る。

「主人公の成長というか、世界観の変化、ですよ。どちらかというと」

沙綾さんは首を小さく縦に振った。

「単なる映像作品ならビジュアルが良ければ十分だろうけど、映画として作るつもりなら、主人公が主人公たる理由、意味合いをもう少し足さないと、見終えたときに物足りなさが残る気がする。それは、私もよく分かる。」

「単純なシナリオの問題じゃないし、キャラクター設定の問題でもない。私が私自身として何を描きたいのか、何を訴えたいのか。北摂の魅力、ビジュアル的なポテンシャルを伝えたい以上の「何か」を見つけないと、今回の取り組みは「映画」にならない気がする。」

「でも、劇的なストーリー、奇抜な変化も足したくないよね。コレはコレで良いんだし……」

沙綾さんに渡した脚本に手が添えられる。自分自身を褒められているような気がして、恥ずかしいような、くすぐったいような不思議な気持ちになる。

「ま、とことん悩んで考えよう。そのために呼んだんだし」

沙綾さんは新しいお茶を入れるために、キッチンに向かってお湯を沸かし始めた。壁際の時計を見上げると、まだ一七時過ぎ。一兄が帰ってくるのもまだまだ先だし、遠慮しないでじっくりディスクッションしよう。帰ってきたら帰ってきたで、巻き込んでやる。

初出 令和三年九月三日 noteにて公開

八月三日（木）

あまりの暑さに目が覚めた。窓が閉め切つてあつて、サーキュレーターも動いてない。喉の渇きが尋常じゃないけど、それ以上に頭がクラクラする。ベッドの上で身体を起こして、エンジンがかかるのをボーツと待ってみても、仄かな気持ち悪さが胸の辺りに延々と居座っているだけで、状況は何も変わらない。

とりあえず、枕元のリモコンに手を伸ばし、サーキュレーターの電源を入れる。首振り機能で、生温い風が通り過ぎては戻ってくる。何度か風を浴びているうちに、多少は頭がハッキリしてくる。

家の中が随分と静かだ。耳を澄ましても、サーキュレーターが首を振るたびに奏でるカタカタという音しか聞こえてこない。窓の外はすっかり明るく、陽も十分な高さに登っているらしい。ベッドに座ったまま、机の上の時計に手を伸ばした。午前一〇時過ぎ。父も兄も、朝の家事を終えた母も、流石に出かけている時間。

バイトも休み、映画撮影も私のチームは休み。それで昨夜、飲み過ぎたんだっけ。晃兄は仕事があるからつて、お酒は一滴も飲まずに先に帰つて、沙綾さんは一兄が連れて帰つて、碧さんと哲朗さんの部屋で飲んで、それから――。

それからの記憶が微塵もないけど、出かけた時と同じ服のまま寝てたんだから、どうにかして帰ってきて、ベッドまでは辿り着いたのか。ベッドの横に放り出してあつたカバンをザッと確かめると、忘れ物も落とし物もないらしい。財布も鍵も入ってる。

とりあえず、水分補給とシャワーを浴びよう。充電していたスマホを取つて、慎重に階段を降りる。リビングに入つて、冷蔵庫を開けた。「天然水」のラベルがついた五〇〇mlのペットボトルと、ウコン的なドリンク剤が入ったビニール袋が、中身も出さずに突っ込んであつた。両方取り出すと、底の方に流麗な文字で書かれたメモが出てきた。

「明後日もよろしく」と書かれた字を見るに、どうやら碧さんのメモらしい。何があつたか全く思い出せないままグループLINEを立ち上げると「瑞希さんは無事に送り届けました」と碧さんのメッセージが残っていた。彼女はそれから電車

で帰宅したらしい。

彼女の心遣いと思うと素直に受け取り辛いけど、この気持ち悪さは早めに何とかしたい。先にビンの方をグツと飲み干し、口の中に残った後味を流し込む感覚で、ペットボトルの水で濯いだ。

何となく小腹も空いた気がするけど、炊飯器を開けてみてもご飯は残っていない。冷凍庫を開けても食パンは切れているらしい。シャワーを浴びてから冷蔵庫のご飯をチンして食べるか、とか考えてたら、スマホの画面に通知が出た。碧さんから、画像が送られてきたらしい。

——スッピンの寝顔も可愛いね。

メイクも落とさないうで寝ずに済んだのは良かったけど、彼女にそんな写真を撮られたのはまずかった。調子に乗って飲まされすぎだよ、私。

返事を考えている間に、リマインダーから通知が届く。一時間後に、哲朗さんと共に「イオンモールで買い出し」の予定になっている。そういえば、そうだった。とりあえず寝汗を流して、出かける準備をしなくては。碧さん対策は、動きながら考える！

初出 令和三年九月一五日 noteにて公開

八月二一日(月)

上映時間の兼ね合いで食べ損ねたお昼を、半券でちよつとだけお得に食べた。家族で出かけると選ぴがちな中華も、一緒に食べる相手が違うと新鮮味があつていい。普段は注文し辛いサイドメニューも頼んでしまった。

ちよつと食べ過ぎた気もしつゝ、下へ降りる前にお手洗いに入る。用を済ませて鏡に写る自分の顔を見ると、いつも通りの化粧つ気のない地味な顔。食べた後の汚れや崩れも特にない。しつかり手を洗つて出ると、哲朗さんはトイレを出たところにあるクレイニングゲームを眺めていた。

私が「待った？」と訊くと、彼は首を横に振つた。そのまま、横に並んでいるクレイニングゲームを一つ一つ眺めていく。

「何か、欲しいものでもあるの？」

「ぜんぜん。うわ、まだこのキャラクター現役なんだ」

彼が満面の笑みを浮かべて指を差した大きなぬいぐるみは、私もどこかで見覚えがある。十年、それより前から居るような気がする往年のスター選手。最近の人気アニメのグッズやら、クレイニングゲーム限定つぽいお菓자에混ざつて、海外アニメの人気キャラクターやら、某ゲーム会社の敵キャラ、ネコつぽいキャラクターのご当地つぽいものまで色々並んでいる。

グルグル回るお菓子をキャッチするゲーム機やメダルゲームの間を縫つて歩きながら、哲朗さんは小さく頷いた。特に未練もないらしく、スツと下へ降りるエスカレーターに乗つた。置いて行かれないように、私も後に続く。

「遊ばなくても良かったの？」

「ああ、うん。眺めてるのが楽しいんだよね」

哲朗さんはとても楽しそうに笑う。

「色んな思惑が渦巻いてるといふか、その片鱗が見える感じがしてさ」

半ば反射的に「ふーん」と応えてしまつたけど、何も理解できなかった気がする。今はとりあえず、納得も同意も棚上げしておこう。

「スタバも喫茶店も、まだ早いよね？」

哲朗さんはお腹に軽く手を添えて言う。このまま一階まで降りればスタバはあ

るし、一回外に出てしまえばファミレスもある。線路をくぐって大学側へ出れば、そっちのスタバも選択肢に入れられる。

正面に見えるフードコートは人影がまばらに見えるけど、手前のスタバには既に列ができつつある。店内をサッと見回しても、すぐに座れる気がしない。今から他の喫茶店を探しながら歩いて、どんだん座りにくい時間になってくる。

「向こうのスタバも一杯だろうな」

彼はそう言いながら、スタバの前を素通りする。フードコートの手前で右に曲がった。後ろのサーティワンをチラリと見てみたけど、夏休みっぽい親子連れでそれなりの列ができているらしい。

線路側の出入り口に向かう哲朗さんの背中を追いかけて、道中の雑貨やカバンに気を取られて足を止めてしまう。商品から顔を上げると、向こうの方に

「無印良品」の看板も見えた。

私が付いてきていないのを察したらしく、哲朗さんはインフォメーションセンターの前で足を止めて振り返った。彼は私の視線を追いかけて、無印の方を指差した。私が頷くと、彼は無印の方へ歩き始めた。

とりあえず、先に化粧水を見て、おやつでも買おう。そこから先は、後で考える。

初出 令和三年一〇月一〇日 noteにて公開

九月九日（土）

☞サイズのオフィスで、今日の分の撮影データをチェックする。二作品同時に走っている状態で、映画撮影としては半分素人ばかりで進めているため、順調に進行しているとは言い難いけれども、余裕をたっぷりとったスケジュール的には、大きな問題はなくここまで来れている。

先月にやった最初の方の撮影では、現場ではデータのチェックをやっていたものの、必要なシーンの撮り漏れがあつたり、そもそも撮影を失敗していて素材として使えないものも入っていたり、記録が不十分で動画素材とどのシーン、どのカットかが不明瞭なものもあつたり、制作進行の拙さが目立っていたものの、こゝうやってその日のうち、できなければ翌日までにデータを確認することで、その辺りの問題は解決できているような気がする。

大学の同期と、バイト先の若手の混成チームで連携を撮りながら、この調子でポスプロも上映も順調にこなせば最高なんだけど、油断は禁物。こういうタイミングで緩むのが一番怖い。

眼がしょぼしょぼしてきた気もするし、ヘッドフォンを付けっぱなしの耳も、微妙に痒さや痛みが出て来た気もする。ヘッドフォンを外し、机の上の目薬を手にとって、一滴ずつ垂らして馴染ませていると、隣に座っていた哲朗さんが「へー」と声を漏らした。

何事かと思い、目薬の刺激を感じながらゆっくり目を開ける。彼は私に、自分のモニターが見えやすいように動かした。

「メイキングの広報ブログが、アクセス伸びてるんだ。それも、この二、三日の間に」

彼が見せてくれているアクセス解析のグラフは、確かにグッと高い山ができてくるような気がする。彼は「で、さらに」と動画サイトのデータも見せてくれた。「コピトカバチャンネルの再生数、視聴者も増えてるといふか、伸びてるんだよね」

こちらはブログのアクセスに比べると、微増というレベルの伸びかただけど、確かに今までは少し違うユーザーが見てくれているらしい。

急に伸び始める理由がピンと来ない。例のインタビュー記事が載ったフリーペーパーは、まだ見本にしかなくていい。

「案外、身内が今まで見てくれてなかったのかもね」

哲朗さんは、聞こえるか聞こえないかわからないの声で、ボソッと呟いた。そういえば、主に沙綾さんが、ルミさんから受け取ったPDFを関係各所に転送していたような。アレがきっかけで伸びているとしたら、彼の説が説得力を帯びてくる。

「この調子なら、ヒイラギも伸びてるかもね。今度、森田さんに聞いてみる」

哲朗さんの権限では、ヒイラギのアクセス数は確認できないらしい。ただ、同様の現象が起きて、ヒイラギも身内や関係者によつて底上げされている可能性は十分にある。

「なんだかんだで、部数も着実に微増だし、次号は思い切つて増やす話もしてるらしい」

哲朗さんの目は、今は誰も座っていない武藤さんの席、奥の打ち合わせスペースへ順番に向けられた。

「フリーペーパーが月末に出たら、色々ハネるかもね」

哲朗さんは、私の方へ向けたモニターを自分が見やすい向きに変えながら、

「有名人の仲間入り、本当になるかもね」と私に笑いかけてくれた。

それは希望的観測すぎる、夢を見過ぎなのではと頭の片隅で思いながら、心の奥底で、激しく躍り出しそうになる気持ちも感じていた。

初出 令和三年一〇月一三日 noteにて公開

一〇月六日（金）

いつもの席でうつらうつらと船を漕いでいると、目の前の机に軽い衝撃が走った。急な音にびっくりして目が覚めた。

「起こしちゃって、ゴメンね」

高らかに音を立ててしまった張本人、森田さんは申し訳なさそうに顔の前で両手を合わせた。彼は私の前に積み上げた三冊の雑誌に手を置いて、「各号、一冊ずつで大丈夫だった？」と確かめる。

「全部ありますよね」

私の問いに、三冊を少しずつずらして表紙を見せてくれる。私は頷いて、「確かに」と答えた。

「わざわざご用意していただき、ありがとうございます」

先月末に出て在庫がまだオフィスにあった第三号以外の二冊は、バックナンバーを管理している森田さんが、自宅から持ってきてくれていた。彼は顔色一つ変えることなく、「いやいや、気にしないで」と笑顔を浮かべる。

「でも、そろそろバックナンバーも在庫がなくなってきたな」

「追加で発注しちゃう？」

「流石にそれは、まだ早いでしょ」

武藤さんと森田さんとで、楽しそうに言葉を交わしている。私はそれを横目に、ずらされた雑誌の四隅を揃えて重ね直す。三冊となるとそれなりの重みがあった。注意を払って手を離しても、多少の音が鳴るのも仕方がない。

とりあえず、自宅まで持って帰らないと話が進まない。私はカバンの中を確かめて、雑誌が入るだけのスペースを作っていく。一冊ずつ立てて入れないと収まらない気がする。手前の第三号から手に取って、順番に詰めていく。

「でも、浪川さんたちには感謝だね」

自分の名前が出たので、何となく顔を上げる。本を詰める作業は止めずにそちらへ目をやると、森田さんはフリーペーパーの例のページを広げて私の方を見ていた。

「君らのおかげで、ヒイラギの一〇〇〇部も見えてきそうだよ」

「本当、大したもんだよね」

森田さんの言葉を、武藤さんが補強する。例のインタビュー記事も、今の上坂さんとの関係も、元を辿れば彼らがきっかけだったような気がするけど、乗った結果、いいように踊らされている気もしてくる。ま、それはそれでアリどころか、全力で最後までやり切ってやろうかと思っっている自分もいるんだけど。

「撮影の件も、無理言っちゃってゴメンね」

森田さんは再び、謝るポーズをしてくれた。私は「いえいえ、そんな」とできるだけ柔らかい声で応えた。

「こっちはどうせ、授業もあるんで」

二班集体で、おまけにこっちは学生と半分素人のチームでは、夏休みの間に全部撮り切るなんて無理だった。余裕のあるスケジュールを組んでいたつもりだったけど、天候不順や自分たちのスキルを考慮に入れてなかったから、どんどん遅延も積み重なった。

幸い、夏の景色として撮っておきたかったシーンは済んでいるし、後は冬や春の画でも問題ない。

「でも、撮らない間に猛勉強するんでしょ？」

私の隣で、刷り上がったヒイラギをめくっていた上坂さんが、誌面から目を離さずに横槍を入れる。疑問符が浮かんでいそうな森田さん、武藤さんに、インタビュー記事がきっかけで教員に火がついてしまった経緯を説明した。

「それで、ヒイラギを持っていくんだ」

森田さんと武藤さんは、納得したように頷いていた。涼しい顔で、我関せずとページを目くる上坂さんを横目で見ながら、私は心の片隅で、「そうやっていられるのも今のうちだから」と何とも雑魚っぽい言葉を思い浮かべていた。

初出 令和三年一〇月二二日 noteにて公開

一〇月二三日（日）

「つまり、二人の出会いがキツカケなんだ」

沙綾さんは、私と哲朗さんを指で差しながら言った。哲朗さんはキョトンとした表情で私の方を見るけど、私も詳しいことは知らない。お誕生日席っぽいところに座っている晃兄に視線を送る。

彼は私の視線をスルーして、沙綾さんの言葉に「ま、そういうこと」と答えた。「御膳立てから先は、本人たちのアレだけど」

「でも、それがこうなってるんだから、大したもんよ」

晃兄は自慢げに「まあね」と鼻を膨らませた。沙綾さんは仕切りに、凄いだの、偉いだのと彼を持ち上げる。この間まで「距離感が分からない」と悩んで周りに相談までしていた割に、凄まじい馴染みっぷり。

もしかして、一兄と哲朗さんにわざわざ時間を合わせてもらってまで、こういう会を開かなくても良かったりする？ 私が沙綾さんの隣に座る一兄に視線を送ると、彼は小首を傾げた。隣の哲朗さんも、何となく居心地が悪そうにビールジョッキを傾けている。

完全に蚊帳の外の我々を他所に、沙綾さんと晃兄は意気投合して、二人で仲良く喋っている。一々聞き耳を立てて話を聞くのも面倒臭くなってきた。彼女らには聞こえないよう、声を抑えて「なんか、ごめんね」と哲朗さんに言った。

「別に良いよ。兄弟の集まりに混ぜてもらって光栄だよ」

彼はそう言いながら、私に微笑んでくれた。一兄にも「忙しいのにごめんね」とヒソヒソ言っていると、「良いって。気にするな」と答えてくれた。

「オレより、二人の方が忙しそうじゃないか」

一兄の言葉に、哲朗さんは苦笑いを浮かべながら、「まあ、おかげさまで」と答える。

「ヒートアップしちゃった先生の特訓は、その後どうなんだ？」

「全然終わらない。お陰でバイトとか全然行けてなくて」

隙あらば課題を詰め込んでくるお陰で、写真屋のバイトどころか、Zサイズのオフィスにすら中々顔を出せていない。船木さんからは、「暇ができれば、いつで

もおいで」とは言ってもらえてるけど、流石にそろそろヤバい気がする。

実践的なテクニク、スキルを中心に鍛えてもらって入るものの、現場や実践で試してみないと血肉にならないところもある。その辺りの相談も、近々先生とやらなきやな。

「アレ、じゃあ二人が顔を合わせるのはいつ振り？」

「チラッと顔を合わせてはいますけど……」

哲朗さんが上を見ながら記憶を辿っている。Zサイズのオフィスに出入りはしているから顔は合わせているけど、こうやって落ち着いて食事をするのは、後期の授業が始まって以来かもしれない。

「なんだかんだで、晃と沙綾に感謝だな」

一兄の視線は、勝手に盛り上がっている二人の方へ向けられる。哲朗さんは納得した様子で「そうですね」と頷いた。私は微塵も納得できていない。

「お待たせしました。涙巻きです」

店員さんが、刻みワサビがたっぷり乗った細巻きを運んできた。盛り上がっていた二人も動きを止め、運ばれてきたお皿に目をやった。

「え、何それ」

晃兄が呟いた。私が「涙巻きだけど」と答えると、沙綾さんが「みいちゃん、それ食べんの？」とちよつぴり引いた様子で言った。

「流石にそれは、ちよつと減らした方がいいんじゃないか？」

一兄まで、上に乗ったワサビを箸で落とせと合図する。そこまでやられると、このままかぶりつきたくなる。思い切つて、一つ口に入れた。強烈な刺激が鼻を駆け抜けていく――。

初出 令和三年一〇月二六日 noteにて公開

一月十五日(水)

私はコートを着たまま、哲朗さんのモニターを、彼の後ろから見ている。立ったまま、裾が暴れないように両手を左右のポケットに入れながら、動画サイトの分析画面をジッと見ている。

「爆発的に視聴回数が増えるとか、チャンネル登録者数が増えるとかはなさそうだけど、ジリジリと高評価、新規訪問者は増えてるね」

先月の上旬に一度グッと伸びて、そこから急落するようなことはなかったけど、勢いそのものは一旦落ち着いたらしい。ジワジワと伸びているようには思うけど、数としてはそこまで多くない。

「パッと見て物凄く良くなった印象はないけど、コンマ何秒のカットの位置とか、数センチレベルでのアングルとか、着実に良くなってる。単純に、見ていて気持ちいい」

「本当に？」

哲朗さんは「本当、本当」と頷いた。照明のコントロールとか、音声周りとか、とても細かいところを気にするようになって、一本一本のクオリティは上がっているという自信はあったけど、客観的な評価が得られてようやく実感が持てた。

「本当はもつと、エフェクトバリバリな動画とかもやりたいんでしょ？」

哲朗さんは分析画面を閉じながら言った。

チャンネルの方針というか、自分の見せたいもの、切り取って伝えたいものが合わないから、要所要所でピンポイントかつワンポイントでしかそういう表現は足せていない。

気合の入ったアーティスティックな動画、エフェクトたっぷりのプロモーションビデオやミュージックビデオのオーダーがあればやれるけど、今の環境でそういう話は多分来ない。

「セカンドチャンネル作るとか、それ用のチャンネル作るとか、やってみる？」

彼は私の方を見ながらも、さっきまでやっていた仕事用の画面を一番前に持つてくる。何もかも彼に頼ってやってもらわないし、それ用のチャンネルを立ち上げるなら自分でやった方がいい気もする。

「でも、そんなチャンネル作っても続かない気もするんだよね」

自分の勉強にはいいけど、自己満足の世界を出た「作品」に至ることは恐らくない。それを沢山作ってみたところで、誰にも見られないだろうし、誰かに見てもらいたくてもやるような性格でもない。

「また、機会があればやってみる。今はまだ地道にコツコツ、かな」

「そっか。了解」

彼はそう言うと、ちよつぱり手持ち無沙汰な様子で私を見ていた。私が「仕事の邪魔しちゃって、ごめんね。ありがとう」と言うと、彼は「ああ、じゃあ」と画面に向き直り、仕事に戻った。

「浪川さんは、今から京都だっけ？」

いつの間にかこつちを見ていた武藤さんが声をかけてきた。私が「はい、先輩のプロジェクトションマッピングを見に」と答えると、彼は「哲朗も行けばいいのに」と言った。

「どつかのライトアップのイベントだろ？」

哲朗さんはモニターから顔を上げる。

「誰かの密命で、この間行きましたよ」

「あれは万博だろ？ 今度は京都じゃん」

そういえば、彼に頼まれてこの前の土曜日、万博の紅葉を見に行ったっけ。なんとなく落ち着かない雰囲気の中、ライトアップされた日本庭園を歩くのは中々楽しかった。哲朗さんは、武藤さんの圧に負けじと言葉を探している。

「学校関係の人がいるのに、一緒に行けないですよ。仕事もあるし」

「夏の撮影で、みんなもう知ってるんだろ？ 仕事は別に明日でも大丈夫だし」

武藤さんの口撃が止まらない。側から見ると、哲朗さんは段々余裕がなくなっているような気がする。

「どごその男に声をかけられても、知らないぞ」

「大丈夫ですよ。友達と一緒に行くんだよね？」

哲朗さんが真剣な面持ちで私の顔をジッと見る。その真剣さがなんだか可笑しくて、やましいことは微塵もないのに視線を逸らしてしまう。それにちよつとヤキモキしているような哲朗さんを見ているのも、なんとなく面白くなってきた。

イベントへ間に合わせるには、もうそろそろオフィスを出て駅へ向かわなきゃいけない。でも、こつちのやりとりももう少し見ていたい気もする。さあ、どうする私。

初出 令和三年一月二日 noteにて公開

一二月二日（土）

目の前の棚に並んでいる色々なお酒を、腕を組んで眺めていた。すぐそこに、缶ビールや缶チューハイが冷やされているコーナーもあるんだけど、今日はこっちの棚から何か選んで帰りたい。

ただ、気持ちとは裏腹にどれを選べばいいのか、全く分からない。お酒の違いも分からないし、銘柄ごとの違いもよく分からない。家で両親や兄がどんなお酒を飲んでいるのかもあんまり覚えていないし、こうやってズラッと並んだ瓶やラベルの中から、「コレだ」と指名するだけの記憶もない。

外で飲む分には、ある程度選択肢が限られているから何となくでも選べるけど、ここで変なものを選ぶと大変なことになるし、あんまり大きいのか高いのはやめて、小さめの手頃なやつにしよう、ってところまで考えてまた振り出しに戻る。やっぱり清酒や焼酎、ウイスキーよりは梅酒みたいなものの方が良いんだろうか、と適当に一つ瓶を取り出してラベルの説明書きを眺めていると、後ろから声をかけられた。

「浪川さん？」

声の方へ顔を向けると、「ああ、そのマスクはやっぱり浪川さんだ」と武藤さんがニコツと笑った。

「こんなところで珍しい。ご家族のお使いか何かですか？」

「ああ、いえ。自家用に、ちよつと」

武藤さんは頷きながら、「ああ、そうですか」と言った。彼はそれ以上私のことを気にすることなく、ささつと自分が欲しいものを見極めてカートに乗せたカゴの中に、二、三本の瓶を放り込んだ。

私がいじつと見ていたことに気がついたらしく、彼はこちらを向いて、「どうされました？」と言った。

「ああ、いや、えつと、何を選んだら良いか、分からなくって」

「ああ、なるほど」

彼はカートを押して、私の側まで戻ってきた。

「探しているのは、梅酒でいいんですか？」

彼の質問に、私は曖昧に「えー、まあ」と答えた。私の答え方も見ていたらしく、彼はサツと瓶を二つ選んで手に取った。

「スッキリが良いならこういうのとか、こつちのタイプですかね」

右手に持った瓶と、棚に並んでいる同じメーカーの紙パックを指しながら言った。お酒に疎い私でも、聞き覚えのあるメーカーだ。左手の瓶には太めの文字で「梅酒」と書いたラベルが貼ってあった。

「甘いのが良いなら、こういうのとか、ああいうのとか」

「はちみつ」やら、「黒糖」やら、黒っぽい瓶も指差しながらお勧めしてくれる。私は少し悩んで、左手の瓶を選んだ。武藤さんは右手の瓶を棚に戻して、同じメーカーの紙パックを棚から出した。

「有名なものと飲み比べれば、段々分かるようになりますよ」

そう言いながら、瓶と紙パックを自分の買い物カゴに入れた。私が困惑していると、彼は「他に、欲しいものありましたか？」と訊いてきた。私が首を振ると、彼はカートを押してレジの方へ向かう。

「え、ちよつと」

「まあ、まあ、良いから良いから」

彼は私の声に耳を貸さず、自分の買い物と合わせて、私が買う予定だったお酒も買ってしまった。わざわざ袋を別に購入し、私に荷物を分けて渡してくれる。私が財布を出そうとすると、彼は頑なに断った。

「たかが数千円ぐらい、気にしないでください。若い娘に身銭を切るのもジジイの楽しみですから」

武藤さんはお酒の棚で出会った時と同じぐらいの、満面の笑みを浮かべた。そのビッグスマイルに、さっきまでの悩みが少し軽くなった気がした。

初出 令和三年一月二日 noteにて公開

二月三〇日（土）

駐車場から出てきた、父と母を乗せた車は、晃兄の運転によって車列に合流した。見通しの良い直線道路なのに、交通量のせいかな、すぐに目で追えなくなる。

私たちの後ろに立っていた一兄は、ふうと息を吐いた。その隣にいた沙綾さんは「つつがなく終わったね」と笑った。

「お祝いしたことないって言ってたけど、十分お祝いしてたじゃん」

「アレがお祝いだったなんて、お前、知ってた？」

沙綾さんに笑われたのが悔しかったのか、お鉢が私に回ってきた。私も答えに窮して、一瞬考え込んでしまう。

「まあ、時期的に家族の忘年会っぽくはあるけどね」

「それはそうね。お誕生日会にしては静かすぎるというか、めっちゃくちゃシュールだよな？」

沙綾さんと哲朗さんは、楽しそうに笑い合っている。これがほぼ毎年の恒例行事になっている私たちには、そのシュールさもよく分からない。まあ、黙々と蟹を食べる会だったから、変なトラブルもなく終わったのは良しとしよう。

「で、どうする？」

一兄が沙綾さんに訊いた。

「飲み足りない気もするし、はしやぎ足りない気もするな」

「哲朗くんは？」

哲朗さんは腕を組んで少し考えてから、「歩きますかね」と応えた。それを聞いた一兄は、沙綾さんに「オレたちも、とりあえず歩いて駅まで行くか」と言った。

「ちょっと遠くない？」

「腹ごなしと酔い覚ましにさ」

一兄は一足先に、茨木市駅の方へ向かって歩き始めた。沙綾さんの方に振り返って、「駅前まで行けば、カラオケもバーもあるし」と言うと、さっきまで気怠そうだった彼女の顔が一気に華やいで、「よし、乗った」と言った。

「ほら、行くよ」

沙綾さんは私たちの背中を押して、一兄の後を追いかける。哲朗さんは私に、「どうする？」と言いなながらも、足を動かしていた。私が肩をすくめて見せると、彼は笑顔を見せた。

一兄を先頭に、ひたすら真つ直ぐ西河原西の交差点を目指して歩く。すっかり陽も落ちてそれなりに肌寒いけど、みんな元気よく、楽しそうに歩いている。交差点までくると、一回向かい側に渡ってから、一七一号線を渡った。茨木川を越えると、JRの高架が見えてくる。集団で車や自転車に気をつけながら歩いていると、ポケットの中のスマホが震えた。信号を渡ったところで取り出すと、晃兄から、無事に帰り着いたというメッセージだった。

「今どこ？ だつて」

一兄に画面を見せた。

「極楽湯の交差点つと。ついでに、一五分後に阪急茨木集合つと」

一兄は私のスマホを手に取り、勝手に晃兄にメッセージを送ってしまった。私は怒っていますよ、と頬を膨らませながら、一兄からスマホを取り返した。一兄は「そんなに怒るなつて」と笑いながら言った。

「ハンドルキーパー押し付けちゃつたし、飲ませてやろうよ」

「帰れなくなつたら、哲朗の家に押し掛ければ良いし」

一兄は、沙綾さんの言葉に「それ、いいね」と冗談めかして言った。哲朗さんは本気で困惑しながら、「そんなに沢山、無理ですよ」と抗議している。

「とにかく、不完全燃焼の忘年会をパーつとやろうぜ」

沙綾さんは「いいね、いいね」と陽気さ全開で一兄の言葉をどんどん煽る。一兄はいつの間にパーティーピーポーになつたのか。あるいは、沙綾さんが彼をそうさせているのか。その真意は、私には分からない。

ただ、そういう二人とそれに翻弄されている哲朗さんとを眺めるのは、なんだかとても幸せな気持ちになつてくる。まだまだ気が早いけど、こういう家族も私は好きだ。

二月三日(日) 午前九時

一人暮らし用の小さな食卓に、卓上の三面鏡を置いて広げてしまうと、それ以外のものを置くスペースはほとんどない。私は申し訳ない気持ち半分、早く済ませなきゃという焦り半分で、慣れない化粧とあまり見たくない自分の顔に向き合っている。

部屋の主は、向こうの部屋から戻ってきた。洗濯物を干し終わったらしい。

「部屋干しだと、今日は乾かないかもね」

哲朗さんは元氣そうに笑って言った。私はシャワーを浴びてもなお、頭が寝ているような気がするのに、彼は何事もなかったかのように手際良く家事を済ませていく。そのテキパキとした動きに、私はより一層焦らされる。

「向こうは一回仮眠してからって、言ってたから早くてもお昼過ぎじゃない？」

彼は自分のスマホを操作しながら、「八時半のバスには乗れたんだって」と一兄たちの状況を教えてくれた。八時半に駅前を出たのなら、帰り着くのはまだまだ先。無駄に焦る必要もない、かも。

私はちよつとだけほつとして、落ち着いて目元のメイクに取り掛かる。

「モノレールで行っても、バスで行っても、昼前には着いちやうな。どうしよつか？」

私が目も手も離せない状況になってから、彼は意見を求めてきた。私は変にズレないよう呼吸を整えてから、「着いてから考えればいいんじゃない？」と応えた。一旦左目だけ終わらせて、「向こうも何時に着くか分からないだし」と付け加える。

「それもそつか。そうだよね」

彼は納得してくれたらしい。ただ、手持ち無沙汰そうに、ずっと目の前に立っているのは変わらない。私は「ああ、ごめんさい」と手元を少し片付けて、三面鏡を手前に引いた。彼は「あ、ごめんね。気にしないで」と結局座らない。

「時刻表とかお店とか、調べてくるよ」

彼は出てきたばかりの部屋へ戻った。そちの部屋からキーボードを叩く音が聞こえてくる。私は微妙なモヤモヤを抱きながら、半分しか終わっていない目元

のメイクを再開する。

この後、また沙綾さんと会うのでもなければ、こんなにメイクすることもないので。やったとしても、どうせ向こうでダメ出しついでのおモチャにされるんだけど。

ここで寝起きして、こうやって顔を作るのもだんだん慣れてきた。ひよつとすると、自宅で化粧する方が下手かもしれない。徹夜も外泊も朝帰りも、いつの間にか普通になってきた。どこまでやれば正解なのかも分からないけど、目元も一通り終わったし、こんなところで良いんじゃない？

三面鏡を閉じて、哲朗さんのいる部屋へ持つていく。こっちの部屋も、随分「私」が侵食している。申し訳ないと思いつながら、いつもの場所へ三面鏡を片付けた。

「お待たせ」

エキスポシティまでの乗り換えを確認していた哲朗さんに話しかける。彼はこちらを振り返って、「うん、可愛い」とさりげなく言った。彼は私の反応を気にすることなく、「どっちで行こうか」と、モニターへ視線を戻す。

どっちだろうと、今の私にはどうでもいい。私も自然体を装って、「どれとどれ？」と彼の後ろからモニターを覗き込むように身体を密着させる。上坂さんならどうするか、普段は考えたくもない相手だけど、今回ばかりは力を借りよう。大晦日はまだまだ、始まったばかり……。

(完)

初出 令和三年一月二二日 noteにて公開